24072文字

Public Unlisted

Reader

その横顔を見ていた

私がその男の子に出会ったのは八月の終わり、嵐の昼下がりだった。

列島を舐めるように移動する大型の台風によって会社が臨時休業を決定したためにその日はいつもより随分早い帰宅になったのだ。確か午後三時頃だっただろうか。昼間なのに分厚い雲が垂れ込めた空は暗く、足元はドロドロで、私はどんよりとした気分で家路に着いていた。

まあ、思い返せばその時期の私はそもそも台風なんか来なくたっていつもなんだかイライラとモヤモヤに悩まされていたのだけれど。
社会人になって三年目、新入社員の頃のようになにもかもが新鮮で無我夢中になれる初々しさなんてもうとっくになくなっていて。新人だからと見逃されることはなくなったのに、若造の言うことだからとなかなか意見は聞いてもらえず。試してみたいアイディアはいくらでも湧いてくるのに面倒臭そうに手を振る課長のあの仕草を思い出すとどうにも口に出す気が失せてしまう。どうせ聞いてくれないんだから何を言っても時間の無駄、ただ与えられたタスクを無難にこなせばいい。そうやって無理やり自分を納得させて、漫然とした時間を過ごす日々。

だからその時、台風で家に帰れること自体はむしろ嬉しかった。早く帰ってビールでも飲もうと考えていて。
そう、それで近道をするために近所の公園を突っ切ったんだった。
視界の悪い暴風雨の中、横目にちらりと過ぎったそれに気がついたのはなかなかの偶然だったなといまとなっては思う。
こんな台風の日に公園で遊んでいる子どもなんているわけもないのに、遊具の上に誰かがいたよ

うな。

　そう思って振り返ったところにあの子が立っていたのだ――――公園で一番高い遊具のてっぺん、両手に開いた傘を一本ずつ携えて。

「あ……」

　口を開けると雨粒が飛び込んできて思わずそのまま閉じてしまった瞬間に、その男の子は無造作にそこから飛び降りた。
　公園に茂る木の葉やビニール袋があちこちでびゅうびゅうと吹き荒ぶ風にもまれて飛び交っていた。二本の傘を構えた男の子はそんな渦に巻き込まれてそのまま空の上へと飛んでいってしまいそうに見えた。
　実際にはそんなことが起きたりはしない。
　だけどわずかでもそう思ってしまうほど、それは奇妙に非現実的な光景だった。

　べしゃりと音を立てて男の子はすぐに地面に落下した。たぶん手も足も盛大に擦りむいているだろう。私はハッとして慌てて彼に駆け寄る。

「きみ、大丈夫？」

　こちらが手を差し出すまでもなく男の子はすぐに立ち上がった。ぱっと周りを見渡して落ちた傘を拾い、それが折れていないのを確かめるとあろうことかまた果敢に遊具に登って行こうとする。

「待って待って、危ないよ。ねえ、何してるの？」

　私は別に子ども好きなわけでもないし、普段だったらわざわざ自分で話しかけたりなんかはしない。うっかり不審者扱いでもされようものならしばらくは立ち直れなくなるタイプだ。
　だけどその時は非常時で、さすがにこれを見過ごしてさっさと帰るなんてことは思いつきもしなかった。

　男の子は一応振り向いてはくれたけれど、ものすごくつまらなさそうな顔をしていた。表情は大人びてはいたものの、実際の年齢はたぶん小学四年生か五年生か、そのくらいだろうか。

「見て分かんない？」
「え？　ええと……」

まさかそんな返し方をされるとは思わなくてまごついてしまう。子ども相手に。

　そんな私に、男の子はため息をついてこう言った。

「空が飛びたいんだ」

　なるほど、と私は思った。
　なるほど、空が飛びたいのか。その気持ちは分からないでもない。嵐に乗って空を飛べたなら。そんなことを人生で一度も想像したこともないとは言えなかった。

　見れば男の子の手足は擦り傷と打撲の痕だらけで、おそらくもう何回もここで挑戦を続けていたのだということが分かる。

「なあ、もういいか？」

　まじまじと見つめる私を鬱陶しげに振り払う彼を危うくぼけっと見送りそうになってしまった。明るい色の髪の先からぼたぼたと雨粒が滴り落ちるのを見てすんでのところで我に返る。

「こんな日にこんなこと、危ないからやめときなよ。怪我もしてるし、そんなに濡れて風邪もひいちゃうよ」
「こんな日だからやるんだって」

　うるさいなあと言わんばかりの顔だった。まあそれはそう、と頷きかけて首を振る。どうにもこの子の言うことには流されそうになってしまう。

「あのね、台風の日だって傘で空を飛ぶなんてできないんだよ」

　こんなことを言うのは酷な気がしたけれど、このまま放っておいたらこの子は大怪我をするまでやめないかもしれないという危機感があった。

「なんでだよ、分かんないじゃん」
「分かるよ。今までだってできてないでしょ」

　何度やったって無駄なんだよ、と言おうとして。それより先に男の子が「そんなことない」と声を張り上げた。
　この暴風雨を貫くような、びっくりするほど切実な声だった。

「今までは無理だって、次こそ飛べるかもしれないだろ」

　ものごとにはタイミングというものがある。
　この子のこの言葉だって、別の場面で聞いていたら「なんてバカな子なんだろう」とだけ思っておしまいだったかもしれない。
　だけどその時、その瞬間の私の胸にはそれが驚くほど深く突き刺さったのだ。
　それは台風の最中というシチュエーションで神経がおかしな調子で興奮してしまっていただけのことなのかもしれないけど、それでも。
　そうか、と。
　何度やったって無駄。何を言ったって聞いてもらえないから。
　だけど、もしかしたら次は。
　だって私は、この子みたいに擦り傷だらけになるほどにはまだ何も試していない。
　そう思ったらなぜだか笑いが溢れた。

「そっか、そうだね」

　笑いながらそう答えた私に、男の子は不機嫌に唇を尖らせた。

「ばかにしてるだろ」
「してないよ、ほんとにすごいと思う」

　ほんとだってと繰り返す私にいよいよ男の子は不機嫌を通り越して不気味そうな表情を浮かべた。まあ確かに怖いだろうな。こっちはまだ笑いも止まらないわけだし。

「きみはすごい」

　私はもう一度心を込めてそう言った。

　二十年近くも前になるそんなことを急に思い出したのは、電車の中の二人組の会話が耳に入ったからだった。
　大きな台風の影響で明日から天気が大荒れになりそうだと、車両内のあちらこちらでその話題が

持ち出されていた。
　そんな中、ふと「師匠は、」という声が聞こえてきたのだ。
　師匠。意味はもちろん分かるけれど日常ではなかなか聞かない単語が意図せず耳に引っかかる。
　その上その声はこう続けた。

「台風の時、傘持って空を飛ぼうとしたんですよね」
「ああ、小学生の頃な」

　なんだか覚えのある話だ。男の子というのは結構みんな同じことを考えるものらしい。
　しかし実行しようとまでするのはなかなか珍しいんじゃないだろうか。私はそう思って横目で会話している二人を確かめる。
　中学生くらいの少年と、スーツ姿の男性の二人連れだった。
　スーツの方はあの時の男の子がいまだったらもうこのくらいになっていそうな年頃で。そう思えば髪の色も似ているような気がする、と私はおぼろげな記憶を引っ張り出す。

　あの後、私を怪しんだのかすぐに公園を立ち去ってしまった男の子。出来事自体は記憶に鮮明だけど、あの子の顔はいまではさすがにもうあやふやになっている。でも彼の涼しげな目元なんかを見ると、あの子が成長したらこんな感じだったんじゃないかという気がしなくもない。
　別に盗み聞きをしたいわけではなくとも、こんなふうに思い出にリンクされるとついついそちらに意識がいってしまう。

「師匠って昔から危なっかしかったんですね」
「失礼な、俺の座右の銘は“安全”だぞ」
「僕に会うまで生きててくれてよかったです」
「うん、モブくん師匠の返事聞いてる？」
「師匠が子どもの頃に僕がいたら飛ばせてあげられたんですけど」
「あー、そうね、そりゃいいな」

　くすりと笑いが漏れそうになるのを唇を噛んで耐える。どうやらずいぶんマイペースな少年のようだった。飛ばせてあげられる、というくだりはよく分からないけれど。

「あ、そうだ。別に今からでもいいのか」

　ぽん、と少年は手を叩く。

「師匠はいまでも空を飛びたいですか」

その問いかけに、思わず息を詰め、肩に力が入ってしまった。
あの男の子も――――いまでも空を飛びたいと思っているのだろうか。
そんな正解を知りようもないばかみたいな感傷に浸ってしまったからだ。
そんな私をよそに、師匠と呼ばれた彼は当たり前みたいに答える。

「そりゃあ飛びたいさ」

そのあっけらかんとした声がやっぱりあの日の男の子にどこか似ているように聞こえて。
あの子がそう答えたんじゃないかと、私はやけに愉快な気持ちになってしまったのだった。

1 2 3 4 5 6

24072文字

Public Unlisted

1 2 3 4 5 6

　それは俺の人生に置ける最低最悪の一日だった。

　学生時代から付き合っていた彼女についにプロポーズしようとした矢先、まさかの浮気が発覚したのだ。しかも三股で、俺はその三番目である。もはや笑うしかない。
　手元に残されたのは給料三ヶ月分とまではいかないけれどそれなりに張り込んだ指輪と、いまとなっては無駄に場所をとるデカい薔薇の花束だけ。
　予約していたレストランは平謝りでキャンセルし、そのまま一人暮らしの部屋で涙も出ないまま茫然とすること三時間。
　ふいに時計の秒針がちくたく刻む音が耳に飛び込んできたことでようやく俺の脳みそは再起動した。

　これはだめだ、このままだとどんどん落ち込み続けて動けなくなってしまう。

　とにかくまずはこの部屋を出よう。ここにいるだけでさっきまでの俺自身の怨念に足を取られてしまいそうだ。
　それにたぶん、こういうときに一人きりでいるのはまずい。
　だけどそれにしたって知り合いに会う気分じゃなかった。連れに泣きついて最終的に笑い話にするにしたってそれはまだいまじゃない。もう少し時間が必要だ。

一人きりにはならなくて、誰も俺を知らないところ。そんな都合のいいところはないだろうかと街を徘徊する俺の目に飛び込んできたのは、ちょっと妙な名前のバーだった。
いつもの俺が酒を呑むと言えば大衆居酒屋ばかりでバーなんて一度も入ったことはない。ふだんの俺ならきっと立ち寄る候補にも入れないだろう。けれどこのバーは名前がなんだかアレだし、立地もすこし引っ込んだところにあって、そこまで敷居が高くはないんじゃないか――というか、これはいわゆる場末の酒場というやつなんじゃないか。そんな失礼な当たりをつけて、少しだけ覗いてみようという気になったのだった。
まあぼったくられても指輪を売ればいいやというやけっぱちな気持ちも手伝って。

おそるおそるドアを開けると、カランとドアベルの音が出迎えた。思った通りというべきか、テーブル席が二つとカウンターの小さな店内はよく言えば落ち着いた、悪く言ってしまえばしみったれた雰囲気を漂わせていた。

「あら、初めて見る顔ね。いらっしゃい」

カウンターの中からマスターが声をかけてくる。常連で成り立っているタイプの店なんだろうか。こういう時ってどう振る舞ったらいいんだろう。

「カウンターでいいかしら、そこどうぞ」

マスターが指差したのは入り口から一番奥のカウンター席だ。俺は軽く頷いて席につく――こういう椅子って高くて座りづらいんだよな。カウンターに合わせるんだから仕方ないんだろうけど。

気さくな様子のマスターは俺がこういう店に慣れていないことを瞬時に見抜いたらしくあれこれおすすめしてくれたので、ありがたく言われるがままに注文する。それでようやく落ち着いてきた俺は店内をぐるりと見回した。

テーブル席は片方が埋まっている。何やら金持ちそうな中年男と明るい髪色の若い男の二人連れだ。二人ともスーツ姿だが、若い方はネクタイがピンク色なのが妙に胡散臭い。
なんとなく様子を見ていると、どうやら金持ちおじさんの方が若い方を「先生」と呼んで持ち上げているらしいことに気がついた。あのピンクネクタイ、いったい何者なんだろう。

まあ俺には関係ないことだ。そうこうしているうちにマスターが大きな氷の入ったグラスと、ナッツとチーズの盛り合わせを差し出してきた。作法も分からないまま口をつける。美味い……ような気もしたがそれより慣れない味で喉が焼けそうだ。

ちびりちびりとグラスに口をつけ、ナッツとチーズをもったいぶって齧っているうちに、テーブル席に座っていた金持ちおじさんの方が席を立った。ピンクネクタイの手をとって感激しきったように何度もブンブンと上下に振り回しまくった挙句に上機嫌のまま会計を済ませて帰っていく。
　残されたピンクネクタイの方はというと、ドアベルの音が鳴ると同時についい今し方まで浮かべていた愛想笑いを瞬時に引っ込めていた。ちょっと怖いくらい切り替えが早い。

　ピンクネクタイももう帰るのかと思ったけれど、彼はそのままカウンター席にひょいと座った。空いている席、それはつまり俺の隣だった。

「お疲れ様」とマスターが声をかけると、彼は「ん、レモンサワー頼む」と気安い調子で答える。どうやら常連らしい。

「最近うちに来る度誰かの相談に乗ってるわね」
「マスターが言いふらしてんだろ、俺に相談してみろって」
「あら、だってあなた評判いいんだもの。リピーター獲得に協力してくれたっていいじゃない。ほら、おつまみサービスしてあげるから」
「チョコが食いたい」
「はいはい」

　マスターにねだって手に入れたチョコを口に放り込んだ彼は幸せそうに相好を崩した。口の端についたココアパウダーを舐めとる舌の先がいやに赤く目について、俺は思わず目を逸らす。そういえば気がつけばジロジロ見過ぎだった。

　しかしこの男、マスターとの会話からしてどうやらこのバーで他人の相談に乗っているらしい。それも評判がいいという。
　だったら俺の話も聞いてくれるべきなんじゃないか？　今日この日に俺ほど誰かに相談に乗ってもらうにふさわしい人間はいないんじゃないだろうか。
　後から思えば酔っ払いのたわごとも大概にしろと両肩を掴みたくなる思考だが、その時の俺はそうだそうに違いないと一直線に思い込んでしまっていた。
　そこまで酒に弱い方じゃないつもりだが、飲み慣れない洋酒のアルコールにやられていたのかもしれない。

「あのぉ……」

　おずおずと話しかけた俺に、彼はきょとんとこちらを向いた。そうするとやけに幼く見える。ま

さか年下か？

「俺も相談に乗ってもらいたいんですけど」

　いち早くマスターが「あらあら、聞いてあげなさいよ」と声をあげ、彼は俺の顔とマスターの顔を交互に見遣ってから、まあいいかと頷いた。

　結論から言えば彼は非常に聞き上手だった。
　なるほどこれは評判になるのも頷ける。こんなところで人に相談をする人間というのはとにかく自分が喋りたいのだ。本気で解決策を求めているというよりは、とにかく話を聞いてほしい。そういうものなのだろう。少なくとも俺はそうだった。
　彼は俺の話をうんうんと（すくなくとも表面上は）熱心に聞き、うまい調子で相槌を入れ、自分が三番目であったというくだりを話したときなんかそれはもう悲痛な顔を浮かべてくれた。
　手酷い目に遭った心にそのささやかな優しさがしみる、というより心にあいた穴にその優しさがジャバジャバ注ぎ込まれて満たされていく。そんな心地がしていた。
　俺は最後にはぼろぼろ泣きながら話をしていたし、彼はそんな俺の肩をあたたかく摩ってくれたし、マスターはもらい泣きしながら「さすがね……」と独りごちていた。

　俺は彼の整えられた指先を見ながら、このひとは今日俺のために遣わされた天使なんじゃないかと疑って、いや期待していた。しこたま酔っていたのだ。喋っていると喉が渇いてどんどん酒を飲んでいたので。

「一杯奢らせてください」
「いや、俺は酒はもう」
「お願いですそれぐらいしないと俺の気持ちが収まらないんです！」

　天使には捧げ物をしないとくらいの勢いで俺は彼に迫り、彼は困り顔で「じゃあ一杯だけ」とマスターに声をかける。

　そして。

　出された酒にひとくち口をつけた彼は、さっきまでの落ち着いた姿はどこへやら、へにゃりとカウンターに崩れ落ちていた。

「あらあ、今日はもうダメね」

マスターがけろりと言う。

「あ、あの、この人……」
「すっごくお酒に弱いのよねえ。調子が良ければもうちょっとくらいは飲めるから一応出してあげたんだけど」

　すごーく薄く作ってんのよ、とマスターは指先で「ほんの少し」を示した。

　木の天板がひんやりして気持ちがいいのか、彼は完全にそこにぺたりと顔をくっつけている。白い耳や首筋がきれいに赤く染まっていた。

　俺はごくりと唾を飲む。
　さっきまで酒の勢いで天使のように思っていたのに、急に生々しく“人間”に見えてきたのだ。
　薄く開いた唇が、うっすら潤んだ目が、なんだかひどく艶かしくて――――

「言っとくけど、その子はやめといた方がいいわよ」

　マスターの言葉に俺は慌てて顔を上げた。
　それと同時にカランと音が響く。入り口のドアベルの音だ。

「ほら来た」
「え？」

　ドアから入ってきたのは長身の男だった。黒髪に黒いスーツの、妙に迫力がある男だ。

「え、え？」

　男は長い脚をこちらへと向けた。大股に一歩、二歩。

「今日はまたお早いお迎えねえ」

　マスターが肩をすくめる。俺は座ったまま本能的に身体を後ろに引いていた。
　男は鋭い眼光で一度こちらを捉え、しかしその視線はすぐに俺ではなく彼の方へと向けられる。

「あれえ、エクボだ」

エクボと呼ばれた男はまだカウンターに懐いている彼をほとんど抱き込むようにして起き上がらせた。

「おら、帰るぞ」

　羨ましくなるような低い美声が蕩けそうに甘く響き渡った。その声と言ったら、マスターがカウンターの中でほうと息をつくのも無理はない。
　その声を直接浴びせかけられた彼は、一応言われたことは理解しているのかよろよろと立ち上がった。

「いつもごくろう」
「分かってるなら一人で酔っ払ってんなよ」

　こういうのに目ェつけられるんだからよ、そう男に横目で見られた俺が蛇に睨まれたカエルのように硬直している間に、男はあっという間に彼を連れて行ってしまう。

　その男が慣れた様子で会計を済ませて出て行くまで、俺は未だ動きを止めたままそれを見送ることしかできなかった。

「いつもどこかで見てたみたいなタイミングで迎えに来るのよね」

　ドアが閉まりきったところでマスターがぽつりと呟く。だったらさっさと止めてくれと飛び出しかけた恨み言をなんとか呑み込んだところで、ようやく俺は肩を下ろして深く深く息をつけたのだった。

24072文字

Public Unlisted

Reader

その横顔を見ていた

　僕が彼と出会ったのは中学二年の時だった。
　慣れているとは言っても転校初日の挨拶は何度やったって緊張する。だから正直なところ彼の第一印象は覚えていない。黒板の前に立って教室中を見回したから、その時確かに彼の顔も見ていたはずなのだけれど。窓際の前から三番目、きっといつもの眠たそうな顔をしていたんだろう。
　たった半年のことだったけど、彼の記憶は僕の中に強く刻み込まれている。

　僕の親は筋金入りの転勤族だ。物心つく前から長くて二年、短くて半年、それくらいのスパンで引っ越しを繰り返していた。
　こんなに引っ越しが多くてはもちろん友だちなんてものはできっこない。僕になにか分かりやすい特技とか、とんでもないイケメンだったりとか、そういう特徴があればむしろ珍しさも手伝って人気者になれたのかもしれないけれど、あいにく僕は平凡でしかもどちらかと言えば人見知りもする方だった。
　たぶん根が暗いのだろう。
　だから転校先ではいつも馴染めずぽつんとしてしまう。ちやほやされるのなんて最初の一日か二日くらい。自分から進んで声をかけられるタイプでもない。どうせ友だちを作ったってすぐにお別れなんだという気持ちも当然あった。
　学校によってはいじめの標的になることもあった。別に毎回というわけではないし、程度としてそうひどいものではなかったと思う。もちろんそれは愉快な体験じゃなかったけど、たいていはエスカレートする前に僕が転校して終わってしまっていたんだろう。なんとなく疎外されて、無視さ

れて、くすくすと笑われる。浮いているというやつだろうか。そう、僕はどこに行っても一人ぷかぷかと浮かんでいた。

　霊幻新隆は僕とは違う意味でクラスでは浮いた存在だった。
　馴染んでいないというわけではない。いわゆるぼっちというわけでもない。彼は特定の人間とつるんだりはしていなかったけれど、クラスの誰とでも普通に喋っていた。
　例えば五人組をつくるとき、四人まで集まったらなんとなくあとは彼に声をかける。二人組をつくるとき、いつも組んでる相手がたまたまいなかったらそのすぐ次に声をかける。彼はそういう存在で、結局余りものになっているのは見たことがない。
　霊幻は変わり者だけど悪いやつじゃない。ちょっと変だけど話し上手で面白い。そういう評価をされていて、クラスの中心人物に誘われたときに本を読んでいるからと断っても仕方ないなと笑って許される。転校して色んなクラスを見てきた僕でもちょっと珍しいなと思うようなポジションだった。
　そんな彼の“浮き方”は僕にとっては羨ましい在りようだった。できればコツを教えてほしい、次に行く学校では実践してみるから。そう思いつつやっぱり自分から話しかけるのはためらわれて、そのクラスでは僕は彼のことばかり観察していた。
　周囲の目をあまり気にしていなさそうな彼は、みんなに遠巻きにヒソヒソされている僕にも普通に話しかけてきた。別に積極的に仲良くしようとしてくるわけでもなかったけど、これは本当にありがたいことだった。たとえば移動教室に迷った時だとか、僕が困って立ち往生していると特に気負った様子でもなく「どうかしたか？」と声をかけてくれるのだから。

　その中学校では、二年生の遠足はハイキングに行くことになっていた。この頃にはもう僕は次の引っ越しが決まっていて、正直遠足なんてもう行かなくてもいいんじゃないかと面倒くさくなっていたけれど、サボっても親がなかなかうるさい。だからみんなが山を登っていくその最後尾を一人のろのろと歩いてついていった。
　霊幻くんは賑やかな先頭集団に混じっていて、ちょっと珍しいなと思ったことを覚えている。
　いま思うと彼はきっと何でもいいから早く山頂につきたかったんだろう。確か上についた人から休憩と言われていたはずだったから。

　僕が山頂についた頃にはもうほとんどの人がお弁当を広げたりシートの上に寝転んだりとすっかり落ち着いた様子だった。

　霊幻くんはとなんとなく目で探してしまう。とは言っても一緒にお弁当を食べたいとかそういうわけでもなかったので、本当になんとなくだ。ほとんど癖みたいなものだった。
　ぱっと見渡せる範囲に彼はいなくて、彼が混ざっていたはずのグループはお菓子を開けて大騒ぎしていた。

ちらりと木々の隙間に彼の姿を見つけられたのは偶然で、幸運だった。僕はやっぱりなんとなくその後を追った。いや、この時はなんとなくではないかもしれない。「何をしているんだろう」「一人で行ったら危ないんじゃないか」その程度のことは考えていたはずだ。

「霊幻くん、何してるの」

　そう声をかけると彼は草むらに突っ込んでいた頭を引き抜いて、それからゆっくりといつもの無表情で振り返ると厳かに言った。

「この山、ツチノコが出るらしいんだ」
「ツチノコ？　探してるの？」

　うんと頷く仕草がやけに幼く見えて僕はびっくりした。あのクラスで一番大人なのが彼だと思っていたから。
　そして、びっくりしたからだろうか、僕は僕らしくもなく積極的な言葉を口にしていた。

「じゃあ、僕も手伝おうか？」

　するとどうだろう。僕の心臓はドキンと大きく飛び跳ねた。
　霊幻くんはいままで見たこともないような顔で笑ったのだ。白い頬がぱっと紅潮して、本当に嬉しそうに。

「ほんとか？」

　そんなふうに言われて、やっぱりやめたなんて断れるヤツがいたら見てみたい。
　僕はお弁当を食べることも忘れて（ちなみに霊幻くんは山頂に到着するなりおにぎりを詰め込んだらしいと後になって聞いた）彼のツチノコ探しに付き合うことになった。
　あの学校で、いや、僕の中学時代で一番楽しかった思い出だ。

　それからというものの、僕の脳裏には彼の笑顔が焼きついて離れなかった。

　ずっと、本当にずっとだ。

　その後も何度か引っ越しをしても、親の都合で引っ越さずに済む年齢になっても。
　ちょっと気になる女の子ができたって、ふとあの日の胸の高鳴りと比べてしまう。

別にあの後、僕と霊幻くんの間には特別なことは何もなかった。ツチノコは見つからなかったし、彼のいるクラスに最後に登校する日だって「じゃあ元気でな」「霊幻くんも」とそれだけで終わったくらい。
　それっぽっちのことに、それでも囚われてしまうことはあるのだ。
　きっと僕はこのまま一生彼のことを忘れられないのだろうと覚悟していた。
　テレビで彼を見かけた日にはひっくり返りそうになったし、ネットでおもちゃにされているのを見ると腑が煮えくりかえりそうになったけれど、あの謎の会見の映像を見ると相変わらず不思議なところに立っている人だなと妙に感慨深くなって、結局僕にとってはあの騒動も大人になった彼の顔を見られて良かったというところに落ち着いてしまったのだった。
　彼の所在が分かっても、どうしてか自分から会いに行こうとは思わなかった。

　だから、まさか。
　また彼と出会う日が来るなんて思ってもみなかったんだ。

「霊幻くん？」

　あの体験からとは言わないけれど、僕の趣味の一つはハイキングになっていた。
　今日も週末に一つ手近な山に登るかと出かけてきたところで。

「お、久しぶりだな」

　そこで彼に出会うなんて、本当にまさかとしか言いようがない。
　隣に少年を一人連れた霊幻くんは、よっと手をあげて僕の名前を呼んでくれた。

「僕のこと覚えててくれたんだ」
「そりゃ同じクラスだったんだし」

　そうは言ったってたぶん僕と同じクラスになったことのある人の九割以上が僕のことを忘れているだろう。霊幻くんだってきっとそうだと思っていたのに。
　僕がこっそり感激していると、霊幻くんの隣にいた少年が口を開いた。

「このひと、人の顔を覚えるのが得意なんですよ」

　美少年といって遜色ない少年だけれど、目つきに険があっていやに威圧的な雰囲気を漂わせている。
　一体彼とはどういう関係なのか。流石に息子という年齢じゃない。かと言って弟にしては離れすぎている。

「僕はこの人の知人です」
「お前、知人って……」

　賢そうな顔をしていると思えば本当に聡いらしい。僕の疑問を適切に読み取ったらしい少年は微妙な自己紹介と共に軽く頭を下げる。霊幻くんはそれに苦笑した。

　その顔に僕はおやと思う。あの頃の彼ならしなかっただろう顔は、なんというか、身内に向けてのそれのように見えたのだ。

「だってそうでしょう。僕は兄さんの代理なので」
「まあお前がそれがいいならいいんだけどね」
「そういえば霊幻くん、どうしてここに？　いま調味市なんだよね」

　霊幻くんは「なんで知っているのか」とは聞かずに肩をすくめた。

「ちょっと依頼で……」
「それはもう終わって、ツチノコ探しに付き合わされているところです」
「……うん、まあ、そんなとこ」

　あっさり少年に暴露された彼はすくめた肩をそのまま落とす。
　確かにこの山はツチノコの目撃情報があることでその手の話が好きな人にはすこしだけ有名だった。

「そっか、霊幻くんいまもまだ探してるんだ」

　なんだか嬉しくなって笑ってしまう。

「よかったらまた僕も手伝おうか？」

すると少年の目つきがさらに鋭くなった。

　なんだろう、この緊張した感じ。
　この子は人見知りなんだろうかと考えて、いや違うと思い直す。それなら霊幻くんの後ろに隠れそうなものだけど、彼は逆に僕と霊幻くんの間にさりげなく立ちはだかるよう一歩前に出ているからだ。

　もしかして警戒されている？　そう気がついて、ハハアとあごを撫でる。

「そんなに心配しなくても、僕はそういうつもりじゃないんだけどなあ」

　ひとりごとのようにそう言うと、少年はうんざりとため息をついた。

「そういうことを言う人が一番嫌なんですよ、こじらせてるから」

　僕はポカンと口を開けた。なんだか目を開かされたような気分だったのだ。
　こじらせている。
　いままでそれが思い浮かばなかったのが不思議なほど、それはぴったり僕の心情にあてはまっていた。
　なるほど、僕はあの日からずっと霊幻くんをこじらせていたのか。

「……もしかしなくても、きみもこじらせてるってわけかな」

　少年はますます嫌そうな顔をして、だけど僕の言葉を否定はしなかった。

「お前ら何の話してんだ」

　霊幻くんだけが僕と少年の顔をかわるがわる覗き込んでは不思議そうに首を傾げる。
　何の話って、もちろんきみの話だよ。
　僕は心の中でだけそう呟いた。

1Reaction

Privatter+

24072文字

Public Unlisted

その横顔を見ていた

　おれは超能力者である。
　まだ子どもの頃に力に芽生え、紆余曲折を経てなんと政府直轄の組織に配属された。一応国家公務員の端くれではあるが、家族にもその本当の配属を教えることはできない秘密のお仕事というやつだ。学生時代の成績はさんざんだったはずのおれがどうやって狭き門に潜り込んだのかという話題は親戚一同が集まった際に盛り上がるいい酒のつまみの一つだった。
　とは言っても別におれの能力はそう大したものじゃない。使えるのはちょっとしたＥＳＰくらいだ。同僚たちもほとんどが似たようなものだったりする。政府の秘密組織なんて言っても漫画のようなエリート集団とは程遠く、実際強い能力者なんていうのはまだまだ野良の方が多いと聞く。もちろん例外だっているわけだが。

　おれの直属の上司であるヨシフさんはその例外のうちの一人だ。前線での戦闘に耐えうる能力を持った、組織の中でも選りすぐりの実力者である。

　そのヨシフさんをして“バケモノの巣窟”と言わしめるのが味玉県調味市という街だった。
　一見どこにでもある地方都市だが、この街では過去に数回大きな事件が、そして小さな事件は数えきれないほど起こっている。この場合の事件とは当然超能力者が起こしたものだ。野良の強い超能力者がなぜか相当数この街に集まっているらしい。それも世界でもおそらく最強レベルであろう能力者たちが。

そしてその超能力者の多くが、この街にある小さな相談所に顔を出している事実も確認されている。

　霊とか相談所。

　影山茂夫と芹沢克也という屈指の超能力者を擁し、上級悪霊まで使役しているとの噂で政府の最重要監視対象になっている霊能事務所である。

「いやいや、だからエクボはべつに俺が使役してるわけじゃないって」

　それ聞いたら機嫌悪くしそうだからやめろよと顔をしかめるのは霊幻新隆、霊とか相談所の所長である。
　霊とか相談所が噂通りの魑魅魍魎の伏魔殿ならばその長たるこの男はどれほどの能力者なのかと思えば、なんと彼は無能力者だった。

「分かってるが、お偉いさんはそれじゃ納得しないんだよ。あれだけの悪霊がただいい奴だから手伝ってくれてる、なんて言ってもな」

　しかめっ面の霊幻新隆に応じたのは我らが上司であるヨシフさんだ。

　彼らは個人的な親交によって月に二度ほど集まって”世間話”をしている。話題は霊幻新隆の個人的な人間関係にまつわるものが多い。彼はなかなかお喋りなのだ――――と、今のところはそういう体裁になっている。
　そこになぜかヨシフさんの部下であるおれがくっついてきて、出入り口の脇に突っ立っているというおかしな状況には目をつぶっていただきたい。

　政府の思惑云々はともかく、当のヨシフさんと霊幻新隆はそれなりに友好的な関係を築いているようだ。いまもある程度の緊張感こそあるが険悪な雰囲気はない。

「ん、悪い」

　そこにヨシフさんのスマホが鳴り、席を立って相談所を出てしまう。室内にはおれと霊幻新隆だ

けが残された。
　もう何度もこの相談所を訪れているが、そういえば彼と二人になるのは初めてだ。
　霊幻新隆は手持ち無沙汰なのだろう、おれに軽く会釈する。階段を降りる靴音。ヨシフさんがすぐに戻る気配はない。

　いまなら、と思った。
　おれは、ずっと彼に聞いてみたいことがあったのだ。

「あの」とおれは口を開く。彼は眠たげな目つきのまま眉だけ器用に釣り上げた。

「そういやアンタとちゃんと話すのは初めてだな」

　そう言って彼は当たり前のように俺の名前を呼ぶ。初めてヨシフさんにくっついてきた時に流れで名乗っただけなのだが、彼はそれを律儀に覚えていたらしい。

「ちょっと聞きたいことがあって」

　彼らに関する資料を読んでいて、ずっと気になっていたこと。

「あなたにとって超能力ってなんですか」

　霊幻新隆は軽く首を傾げた。けれど特に考えるような間も空けずにあっさりと答える。

「そいつの個性じゃないか？」

　その言葉に嘘はなかった。

　おれの使える超能力はちょっとしたＥＳＰ、嘘を見抜く力だ。ものすごく集中した状態でないと使えないし、嘘だと見抜けたとしてもその詳しい内容まで分かるわけでもない、せいぜい嘘発見器よりは精度が高い程度の能力。

　影山茂夫の聴取記録には、彼らが出会った際に霊幻新隆がいまと同じことを言ったと残されている。

　彼自身は無能力者の一般人だ。その時はおそらく超能力が現実に存在しているとすら思っていなかっただろう。軽い気持ちでそんなことを言った可能性もある。

しかしそれから後に彼は超能力の本当の恐ろしさをまざまざと見せつけられたはずだ。
　そして、その上でいまも心からそう考えている。

「……そうですか、ありがとうございます」
「え、いまの何かのテストか？　もうちょっとちゃんとした方がいいやつ？」
「あ、大丈夫です。おれが気になっただけなんで」
「ふーん、それならいいけど」

　彼がそう言うのと同時に、ドアの向こうで階段を上がってくる音がした。ヨシフさんが戻ってきたのだろう。おれはもう黙ってぺこりと頭を下げた。

　霊とか相談所を辞した後、道すがらヨシフさんに尋ねられた。

「何か話したか」

　おれは隠すつもりもなかったので素直に答える。

「あなたにとって超能力ってなんですかって聞きました」
「へえ、それで？」
「その人の個性だそうです」
「呑気なセンセイだなあ」

　知ってたが、と苦笑するヨシフさんにおれも笑う。
　子どもの頃、嘘を嘘と見抜いてしまえば黙っていられなかったおれは、家族にも薄気味悪がられていたことがある。いまとなっては「アンタ小さい頃はちょっと怖かったのよ、変なこと言って」なんて鉄板の笑い話にされるくらいの、その程度のことだった。

　けれど、あの頃のおれにもそう言ってくれる人がいたのなら、ずいぶん呼吸がしやすかったんじゃないだろうか。
　そう思うとすこしだけ影山茂夫が羨ましい。

「あのひと、なんていうか」

　言葉に迷ったおれをヨシフさんが胡乱げに見遣る。

「そういうところなんだろうなあって思いました」
「どういうところだよ」
「そういうとこですよ！　分かるでしょヨシフさんも！」
「もっと具体的に言えないのか？」

　おれのふわふわした言動に呆れ返るヨシフさんは、しかし分からないとは言わなかった。だからそれはつまりそういうことなのだ。

「あのひと見てるとこう、安心するようなソワソワするような気になるっていうか……なんか対超能力者用のフェロモンでも出てたりして、なんて」

　それでも一応言い直そうとしてみてもどうにも要領を得ないものだから諦めて茶化して濁そうとふと横を見ると物凄い真顔で凝視されている。
　驚いて「どうしたんすか」と声を上げようとするもそれよりヨシフさんが全力で俺の尻を蹴っ飛ばす方が速かった。

「いてえ！」
「バカなこと言ってないでしっかりしろ」
「冗談に決まってるじゃないですかあ」
「本当に冗談ならいいがな」

　じろりとおれを睨みつけた目が、ふいに真剣味を帯びる。

「お前があのセンセイにいかれて問題でも起こしたら」
「起こしませんけど？」
「聞け。俺たちがあの相談所の担当を外されでもしてみろ、相当面倒なことになるぞ」

　咄嗟に背筋が伸びた。あ、これは、と悟ったのだ。これは本気の忠告なのだと。
　政府のお偉いさん方は調味市の能力者たちをあらゆる意味で重要視しているし、しかもその考えは決して一枚岩ではない。
　そして、その中でもヨシフさんやおれが属しているのはかなりの穏健派である。

「じゃあヨシフさんも気をつけてくださいよ」

ざわついた神経を落ち着かせるためにわざと叱られそうなワードを選んでそう言ったが、ヨシフさんは叱ってはくれなかった。
その代わり苦々しい表情で「分かってるよ」とだけ答えて煙草に火を点けると、憂鬱そうに深く煙を吸い込んだ。

24072文字

Public　Unlisted

その横顔を見ていた

　自分で言うのもなんだけれど、俺は営業としては結構優秀だと思う。
　うちの会社自体そう大した企業じゃないとは言えその中での成績は毎月当然のようにトップを走っているし、社内でも疎まれないようなかなかうまくバランスをとってやれているつもりだ。仕事の内容自体にも不満はない。俺にとってはこれが天職だと思っている。

　ただ、なんとなくずっと胸に引っかかっているものがあった。折に触れては思い出し、かと言って別にどうにかできるものでもないからその度頭を振って追い払う。
　それは、結局ずっと追い越すことができなかった背中。元同僚のことだ。

　そいつの名前は霊幻新隆といった。驚いたことに本名だ。名刺を出すたび客にも驚かれるので本人は開き直ってそれを話題のとっかかりに使っていた。
　結構ウケがいいぞという横顔は真顔で、実際それをどう感じていたのかはまったく窺えなかった。まあそれに限らず何事に関しても一体なにを考えているのかいまいちよく分からない男だったんだが。

　霊幻はとにかく抜群に営業職に向いた男だった。入社して研修を終えるとすぐに営業部の全員をごぼう抜きして成績トップの座に立ち、それを喜んだ社長に異例の表彰までされていた。

　新卒新入社員のあまりの優秀さに、枕でもやってんじゃねえのなんて陰口を叩く先輩までいて漫

画みたいだなとちょっと面白くなったことを覚えているが、当時の俺が霊幻のことを穏やかに見ることができていたかと言われるとそれがそうでもない。
　なんでも小器用にこなす自信があった俺は、自分こそがいわゆる“優秀で一目置かれる新人”になるつもりでいたからだ。さすがに霊幻のそれほど派手な展開は想定していなかったのだが、現実は妄想を軽く超えていた。

　そんなわけで当時の俺は霊幻を見ては歯噛みする日々を送っていた。
　同期の連中は分かりやすく霊幻を煙たがるやつと逆に擦り寄りたがるやつに分かれていたが、霊幻を嫌うやつらは俺を神輿として持ち上げたがった。俺は俺で、誰かさんのおかげで霞んではいたものの新人としては有望だったからだ。

「霊幻なんて裏で何をやっているか分かったもんじゃない」「本当ならお前が同期の中でトップだろ」なんて分かりやすいおべっかを使われるのはありていに言って不愉快だった。こいつらバカじゃねえのとさえ思っていた。
　霊幻が優秀なのは仕事ぶりを見れば一目で分かる。お前ら研修中のあいつを見ていなかったのか、ロープレやっただろ、その目は節穴か。

　そういうわけで俺は自分は霊幻を嫌いながらも他人のやつへの陰口にもイライラするという二重のストレスを負わされていたのである。

　霊幻本人はそんな周囲の評価など素知らぬ顔で常に飄々としていたのがまた腹の立つところだった。褒められれば涼しい顔で笑って応え、たまにボソッと嫌味を言われてもやっぱり涼しい顔で笑っていた。ぼーっとした無表情と笑顔、思い返してもこの二つ以外の表情を浮かべていた覚えが一切ない。さんざん目で追っていたはずなのに。

　霊幻とは個人的に話をしたこともほとんどないが、一度だけ会社の喫煙所で二人きりになったことがあった。
　最初は二人並んで黙って煙草を吸っていたのだが、俺の方が耐えられなくなって口を開いたのを覚えている。

「霊幻はすごいな」「研修中からこいつヤベーと思ってたけどそれ以上だったわ」「いやあもう追いつける気がしねえよ」

　確かそんなことを言っていたと思う。自分の言葉が上滑りし続けて焦ってばかりいた記憶が強くて詳しい内容までは覚えていないが、とにかくそういう本音が透けて見えるような負け惜しみだ。

だけど、その後に霊幻の言ったことはよく覚えている。霊幻の方はたぶん何気なく放った言葉だ。あちらはきっと忘れているだろう。それでも。

「でもお前、この仕事好きだろ？　俺よりずっと向いてると思うけどな」

　霊幻は笑っていなかった。こっちを向きさえせずに無表情でそう言って、深く煙を吸い込んで、吐き出して、それから「じゃあ俺もう行くわ」と喫煙所を出て行った。

　その間、あまりの衝撃に返事もできなかった俺なんかには気づきもせずに。

　向いているのか、俺は。霊幻よりずっと？
　次に喫煙所に入ってきた先輩にどうしたと声をかけられるまで、俺はずっと霊幻のぼんやりした横顔のことばかり考えていた。

　そうして人の内心を掻き乱すだけ乱していった霊幻は、あっさり会社を辞めてしまった。俺はなんとなく「そうだろうな」と思った。本当になんとなくだが、こいつがずっとこの会社にいる方がびっくりだとも思った。
　結局霊幻と二人で話したのはあの喫煙所で一度きり、あっちは俺のことなんかもう覚えてもいないんだろう。この先俺の人生があいつと交差することもきっとない。

　それが思わぬところでまたその名を聞くことになってしまった。
　テレビで見かけて訳のわからない炎上をしていた時も仰天したが、今度はある意味もっと驚いた。

　合コンで出会った男からその名前が飛び出したのだ。

　幹事の知り合いやそのまた知り合いまで手当たり次第にかき集められたらしい集まりの中、その男は急遽数合わせで駆り出されたらしく幹事に手を合わせて拝まれ苦笑していた。
　俺の隣に座ったので、軽く挨拶して観察する。俺よりはすこし年上だろうか。
　体格がよく、おとなしそうな雰囲気は転じて優しげだとも言える。こういうのが好みの女の子って結構いるんだよなあ、気が優しくて力持ちってタイプ、ええとセリザワさんね、と俺はその名前を脳内メモに書き留める。

なにせ営業職なので、人の顔と名前を覚えるのは習い性なのだ。

　案の定セリザワさんはそこそこにモテた。
　俺がちょっといいなと思っていた娘もセリザワさんに標的を定めたらしいのがすこしばかり面白くなくて、俺は目の前に座る女の子の相手をしながらも隣で会話するセリザワさんとその娘のことを横目でちらちらと気にしていた。

「やだあ、セリザワさん、ちょっとそのレーゲンさんって人のこと好きすぎじゃないですかあ」

　一際高い声で挙げられた名前に、俺は思わず「えっ」と反応してしまっていた。セリザワさんたちの視線がパッとこちらに注がれる。

「あ、すんません、知り合いと同じ名前だったから……」

　というかもしかして本人じゃないのか。レイゲン、なんて名前がそんじょそこらにいるとも思えない。家族や親戚の可能性もあるというのに真っ先にそう食いついてしまった時点でやっぱり俺はいまだにあいつのことを気にしているらしい。

「それってもしかして霊幻新隆……」
「あれ、お知り合いですか？」

　しかしやはり本人だったようだ。

「俺の上司なんですよ」
「え、あいついま何やって……」

　あ、霊能者ってやつか、まだやってるのかと思い至って口をつぐむと、セリザワさんは「小さな相談所をやってるんですけどね、そこの所長なんです」と言った。

「あいつ、ってことはもしかしてご友人とか」

　あ、警戒されたな。仕事柄他人の機微にはそれなりに敏感な俺でなくてもすぐにそうと分かる口調だった。
　女の子たちもちょっと戸惑っている。
　なんだろう、なんというかこう……ずいぶん過保護だ。

「いや、前の会社の同期です」

　セリザワさんの妙な圧に耐えかねた俺は慌てて弁解する。体格がいいだけに不穏な顔をされるとふつうに怖い。

「ああ、なるほど」
「まああっちは俺のことなんてもう覚えてないと思うけど」
「そんなことは……」
「いや、ほんとほんと。あいつはすげー目立ってたんですけどね、あっちからは俺らのことなんて眼中になかったんじゃないかなあ、はは」

　ヤバいな引かれそう、と思いながらも口が滑る。あいつの話ができる相手なんかもういなかったから、久しぶりに口に出すとブレーキが利かない。
　俺の中にずっとわだかまっていたあいつへのコンプレックスとか、あるいはもっとタチの悪いものがどんどん溢れ出してしまいそうだった。

　けれど、セリザワさんの一言はあっさりとそんな俺の息の根を止めた。

「本当にそんなことないですよ、あのひとは誤解されやすいですけど周りのことをすごく大切にしますから」

　穏やかな声そのものが、あまりにも分かりやすくその対象を愛しんでいることを語っている。
　セリザワさんの対面で女の子がこっそりため息をついたのが見えてしまった。

「眼中にないなんて、そんなことないです」

　あったんだよ。本当にそんなことあったんだって。あの頃の霊幻はそうだった。アンタが知らないだけだ。

　そう言い募るのは簡単だったが、俺はもちろんそうはしなかった。そんなの自分が惨めなだけだ。
　アンタとその周りとやらはあいつに大切にされていて、俺たちの時はそうじゃなかった。つまりそういうことなのだから。

「……なんかあいつ、すげー変わったんですね」

せめてもの抵抗にそうぼやくと、セリザワさんは首を捻ってトドメを刺してくる。

「誰も気づいてなかっただけじゃないかな」

　すごいオーバーキルしてくるな、この人。誰だよ優しげって言ったの、俺だよ。全然優しくないじゃないか。

「そうですかねえ」と引き攣った笑いを漏らしながら、俺はあの日の喫煙所を思い出す。
　そして、あの時俺がもう少し踏み込んでさえいればもしかしたら俺もセリザワさんの言葉に頷くことができたのかもしれないと、そんなどうしようもないことを想像した。

コメント

24072文字

Public Unlisted

その横顔を見ていた

1 2 3 4 5 6

「アンタ結構ブラコンだよね」
　ある程度親しくなった友人には大抵こう言われる。

　三つ年下の弟、新隆とはいつもそっくりな姉弟だと評されながら育ってきた。実際顔だけ見れば我ながら本当によく似ていると思う。

　中身はと言えば、こちらはあまり似ているとは言い難い。

　昔から無鉄砲で後先考えず自分が興味を持ったものに一直線、歳の割に大人びていると言われがちだけどそれにしては夢見がちなところもある弟は、私にとってはいつだって危なっかしくて目が離せない存在だった。
　何せちょっと油断していると嵐の中傘を持って外に飛び出していったり、川に遊びに行けば姿を消して一人黙々と上流の方へ向かっていたり、家の中ですら気づけば床下に潜りこもうと企んだりの問題児なのだ。その面倒を見ていたのだから私がしっかりしたお姉ちゃんだねと言われるようになったのも仕方のないことだろう。

　それでも小学生くらいまではまだ良かった。ふだんは眠たげな目をきらきらさせて、何やら子ども向けの図鑑を差し出してきては鼻息荒くツチノコやら河童やらのページを見せつけてくれて。ああなるほど、急にいなくなったのはこれを探しに行きたかったのねと呆れながらも納得できたか

ら。

　だけど中学生ともなるとそうもいかない。弟は行動の面では落ちついてきたものの、逆に何を考えているのか教えてくれることは減ってしまっていた。
　私が部活を終えて学校に帰ってきた頃には帰宅部の新隆はとっくに部屋に引っ込んでいて、たまに出かけるところにどこへ行くのかと声をかけても「別に」とそっけない返事しか返ってこない。
　思春期なんてそんなものかもしれないけれど、弟がつまらなさそうにしているとなんだか私もつまらない気持ちになったものだった。

　そんな新隆も中学三年になった辺りで身長がニョキニョキ伸び始め、あっという間に私を追い越してなんだか大人になってしまったような顔をすることが増えた。
　そしてその頃、私の当時の友人たちの間では新隆の人気がにわかに高まっていたのだ。
　例えばこういうことがあった。

「ねえねえ、昨日コンビニで一緒にいたの誰？　彼氏？」

　その前日の夜は、新隆を連れて家のすぐ近くのコンビニに行っていた。
　私は高校三年生になって受験勉強に本腰を入れていたが、たまにはすこし息抜きに甘いものでも買いに行こうと財布だけ持って家を出ようとしていたのだ。
　けれどその時、部屋から顔を出した新隆に呼び止められた。

「どこ行くんだよ」
「コンビニ。ついでに何か買う？」
「……いい。つーか俺が行くわ、何買うの」
「え、なんでよ」

　その頃の新隆と言ったらおつかいなんか頼もうものならものすごく嫌そうな顔をする反抗期で（それでも行くには行ってくれたけど）、それが自分が行くなんて言い出したものだから私はすっかり驚いてしまった。

「なんでって……一応女子高生なんだからこんな時間に出かけようとすんなよ」
「えっ、ああ、そ、そう？」

　むすっとした顔でそんなことを言われて、思わず変な感じにどもってしまう。コンビニなんてすぐそこだし、夜って言ったってまだ九時にもならないし、言ってるアンタも中学生だし、なんてまごまごしているうちにも新隆はサンダルをつっかけて玄関ドアに手をかけた。

「で、何買うって？」
「あ、いや……そうだ、じゃあ一緒に行こうか。アイス買ったげるよ」

　咄嗟の思いつきでそう言うと、弟はきょとんとして、それから「やりい」と笑った。
　そうするとぶっきらぼうだったその顔は途端に昔に戻ったようなあどけなさをあらわして、私はなんだかとても嬉しくなった。

　————というようなことを、まあ私の心情は抜きにして語ると、友人たちは一気に盛り上がり出したのだ。

「やだー、うちのバカ弟と全然違う！」
「弟くんってあの子でしょ、結構背が高くてさあ」
「あれ弟？　わりとかっこよかったんだけど」
「うちなんか兄貴でもそんなこと言わないよ。爪の垢煎じて飲ませたいわあ」

　そういうことを何度か繰り返していると、冗談ぽくではあるけれどちょっと本気の目をしてくる子も現れるわけで、私はそれを気づかないふりでかわすのに結構苦労した。
　そして、その気づかないふりを見抜いたりなんだかんだ言って弟の話題をしょっちゅう出してしまうことに気がついた友人に言われるわけだ。アンタ結構ブラコンだよね、と。

　そういうわけで仲間内ではブラザー・コンプレックスの称号を冠されていた私だが、大人になってからはすっかり弟とは距離が開いてしまっていた。
　新隆が大学入学と同時に家を出て、それからほとんど実家には寄り付かなくなったのだ。新卒で入社した会社をあっさり辞めてしまったかと思えば胡散臭いとしか言えない商売を始めたりなんかして、あまり親とは折り合いがいいとは言えない状態になっていたからそりゃあ帰りたくもないだろう。

　そんなしばらく会っていない弟のことをやけにしみじみと詳細に思い出したのは、私が現在その弟が住む調味市にいるからだ。
　ちょっとした用事で知り合いに会いにきたのだけれど、午前中で用事は終わって時間を持て余すことになってしまった。
　もちろんこのまま帰ってもいいけれど。駅前のケーキ屋が目に入ってニヤリと笑う。
　今日は十月十日、我が親愛なる弟の誕生日だった。

小さなケーキの箱を片手に、スマホで目的地を探す。

あった、霊とか相談所。

びっくりするほど怪しげな看板がかけられた雑居ビルになんとか辿り着き、何とも言い難い感覚に襲われる。これは呆れているのか、それとも心配しているのか。自分でも微妙なところだった。

エレベーターもない小さなビルだ。四階まで階段で上がっていく。ただでさえ息が上がりそうなのに、ケーキを崩さないよう気にかけながらというのはなかなか辛い。

白く小洒落た紙箱には五号サイズのホールケーキが入っている。

最初はカットケーキをいくつか買おうかと思っていたのだけれど。
新隆と、確か以前聞いた話じゃ正社員が一人とバイトが一人。ちらっと話していた弟子とやらがそのバイトの子なのかどうかも分からない。一体いくつ買うべきかと迷ったところにそれが目に入ったのだ。
真っ白なクリームに苺が並べられた、可愛らしいサイズの、いかにも誕生日ケーキっぽさのあるホールケーキが。

正直いい年をした男の誕生日に姉がホールケーキを持ってくるってどうなんだろうという疑問もよぎったけれど、嫌がられたらそれはそれで面白いからいいやと割り切ることにした。

四階まで上がりきったところにあったドアをこんこんとノックする。お客さんがいたらどうしようか。もうケーキだけ置いて帰ろうかと思案する。

けれど相談所にお客さんは来ていなかった。それどころか新隆本人も不在だったのだ。

「すみません、いま師匠……所長は出かけてて」

そう言いながらドアを開けたのは、いまどきちょっと珍しく黒髪をまっすぐに切り揃えた男の子。
彼は私の顔を見て驚いたように目を見張った。

「あれ、ええと、違ってたらすみません、あの」
「たぶん違ってないかな。新隆の姉です」
「やっぱり！」

　やはりいまでも顔はよく似ているのか。最近会っていないからどうかと思ったんだけど、そこは変わらないらしいことにどうしてか安心してしまう。

「師匠ってことは、もしかしてあなたがお弟子さん？」
「あ、はい。僕が師匠の弟子です」

　奇妙な英語の例文みたいな言い方に思わずくすっと笑うと、彼は慌てて「影山茂夫です」と付け加えた。

　そこで、彼の肩越しに見える相談所内の様子に気がついた。
　室内は色紙の輪っかや何かで不器用に飾り付けをされている。

　これは、まさか。

「え、これもしかして新隆の誕生日……」
「はい、師匠が出かけてる間に準備して驚かせようと思って」

　無表情がすこし張り切っているように見えなくもない。

「それじゃもしかしてケーキとかも用意してる？」

　白い箱を掲げながら尋ねると彼は「あっ」と声を上げてから頷いた。

「それ、師匠にですか」
「そうなんだけど……食べきれないよねえ」
「あ、いえ。人はいっぱい来るのでそれは大丈夫なんですけど」
「え、いっぱい来るの？　新隆を祝いにってこと？」

　彼はまたこっくりと頷く。

「わー……あなたが企画してくれたの？」
「というかみんな来たがるので。バラバラに来るくらいだったらもうみんなでやろうと思って」

みんな来たがるって、本当に？
　新隆は友人の少ない子どもだった。別に仲間はずれにされていたわけじゃなさそうだったとは言え、やっぱり姉としてはちょっと気を揉んだりもしていたというのに。

「師匠は、ええと……なんだかんだ言ってみんなに好かれてるので」
「なんだかんだ？」
「はい、なんだかんだで」

　唖然としている私に彼は淡々とした調子で繰り返した。

「おかげで相談所もすごく賑やかになって……ちょっと前まで僕と師匠しかいなかったのになって思うこともあります」

　それから彼は自分で言っておいて戸惑ったような顔をした。

「すみません、変なこと言ったかも」

　私は「いいよ」とだけ言って首を振る。
　たぶん似た顔相手に意図せず零してしまったんだろう本音に、あまり首を突っ込む気にもなれなかったから。

「じゃあ、ケーキだけ置いていくから渡しておいてくれる？　小さいけどみんなで食べちゃってね」
「お姉さんも寄っていきませんか。そろそろ帰ってくると思うので」
「いいからいいから」

　今日はもう十分、そう言って白い箱を押し付ける。本当にもう満足な気分だったのだ。
　彼はすこし迷う仕草をしたけれど、素直にそれを受け取った。

「何か伝言とか……」

　彼にそう言われて、私はちょっと考えて首を振った。

「伝言はいいわ。そうだ、それより」

あなたに、と指を指す。

「あの子のことよろしくね」

突然の言葉に彼は目を丸くして、けれどすぐに「はい」と頷いた。頼もしい限りだ。

彼に背を向けて階段を降りる足取りは妙に浮かれている。嬉しいような、でも同時にどこか寂しいような不思議な気分だった。

あの飾り付けをされた部屋で祝福される新隆の顔を想像してみれば、なぜだか私の頭の中の弟は子どもの頃のまま、照れたように笑っている。

近いうちに、今度はちゃんと連絡をしてから会いに来ようと思った。

コメント